

## モルモットのアレルギー性好酸球性気道炎症に伴う咳感受性亢進に対するエリスロマイシン、麦門冬湯、イトラコナゾールの影響

金沢大学附属病院呼吸器内科 徳田麗、大倉徳幸、片山伸幸、西辻雅、藤村政樹

【背景】アトピー咳嗽患者では、カプサイシン咳感受性が亢進しているが、適切な治療（ステロイド薬やヒスタミンH1拮抗薬）によって、症状の軽快とともにカプサイシン咳感受性も正常化することが知られている。しかし、ステロイド薬の投与でも症状が残る難治性アトピー咳嗽患者に対する治療法は確立していない。一方、麦門冬湯（漢方）・イトラコナゾール（ITCZ; 抗真菌薬）・エリスロマイシン（EM; マクロライド系抗菌薬）は、本来の薬理作用とは別に、免疫調整作用を有することが知られている。

【目的】モルモットの抗原誘発好酸球性気道炎症とそれに伴うカプサイシン咳感受性亢進に対する上記薬剤の影響を検証する。

【方法】モルモットを卵白アルブミン（OA）によって能動感作し、OAを吸入暴露して好酸球性気道炎症を惹起した。OA吸入暴露後、12時間毎に、①麦門冬湯または蒸留水を経口投与 ②ITCZまたはその溶媒を腹腔内投与 ③EMまたは蒸留水を腹腔内投与した。OA吸入曝露48時間後にカプサイシンに対する咳感受性を測定して、気管支肺胞洗浄（BAL）を行い、細胞分画を算定した。

【成績】EMは用量依存性に咳感受性の亢進を抑制した。また、用量依存性にBAL液中の総細胞数の増加を抑制したが、細胞分画の比率は変えなかった。これに対し、麦門冬湯とITCZは咳感受性の亢進には影響せず、またBAL液中の総細胞数、細胞分画にも影響しなかった。

【結論】EMにはアレルギー性咳感受性亢進を抑制する作用があり、咳感受性亢進を基本病態とする好酸球性気道疾患であるアトピー咳嗽に有効である可能性が示唆された。その機序の一部として、血管透過性亢進の抑制による抗炎症作用が働いた可能性がある。機序の詳細は今後の検討課題である。